

## 2019 年度後期 授業改善アンケート集計結果に対する意見

—大学院全体—

社会イノベーション研究科長 古川 良治

大学院の授業については、全 12 項目のうち 9 項目において、5 点満点で平均が 4.50 以上となり、概ね良好な評価が得られていた。最も評価が高かったのは「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」(4.93) であり、「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」(4.89)、「この分野への興味・関心が引き起こされた」(4.89)、「教員は教室内が学習にふさわしい状態（私語対応等）に保たれるように心掛けた」(4.87) という回答が続いており、いずれも高い評価となっていた。

「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」と他の項目の相関係数については、「この分野への興味・関心が引き起こされた」(0.78) が最も値が高く、昨年と同様の傾向であった。一方、相関係数が 2 番目に高かったのは「シラバスと授業の内容が一致していた」(0.60) であり、昨年とはやや異なる傾向となっていた。

また、授業で用いられた授業手法としては「質疑応答」(73.2%)、「課題（レポート等）」(69.6%)、が高く、授業を通じて身についた資質・能力としては「この分野の知識、学力」(91.1%)、「論理的思考力」(76.8%)、「構想力」(67.9%) が上位に挙げられている。

これらの結果から、大学院における授業では、質疑応答や課題を中心とした学びに学生が積極的に取り組み、専門分野への興味・関心が喚起され、学生が当該分野の知識、学力を得ているという様子がうかがわれる。今後も、授業の総合的評価に影響を与える諸要因に留意しつつ授業を行うことにより、一層充実した授業を行っていくことが望まれる。

以上

以上